

### 小麦の赤かび病の適期防除（再々掲）

令和6年4月1日から5月2日まで、赤かび病菌の子のう胞子の飛散好適日が10日出現しました（図1）。特に、1回目の薬剤散布適期の期間で胞子飛散好適日が連続して出現しています。県病害虫防除部は本病の発生が平年より「やや多い」と予報したので（QRコード参照）、1回目の薬剤散布を適切に実施しましょう。

また、令和6年産の小麦でわずかに幼穂凍死が発生しました（図2 右）。幼穂凍死の被害を受けると遅れ穂が発生し、出穂がばらつきます。出穂の状況に応じて追加防除を検討しましょう。

過去の気象データと赤かび病の発病穂率の関係をみると、5月中下旬に赤かび病菌の子のう胞子飛散好適日が連続して出現した場合、発病穂率が高い傾向が見られます（図1）。2回以上薬剤散布をする際は、薬剤耐性菌の出現を防ぐために、FRACコードが異なる薬剤を用いましょう（表1）。

**小麦の赤かび病の防除適期**  
1回目 開花始期～開花期（出穂期の7日～10日後頃）（図2 左）  
2回目 1回目の7日～10日後

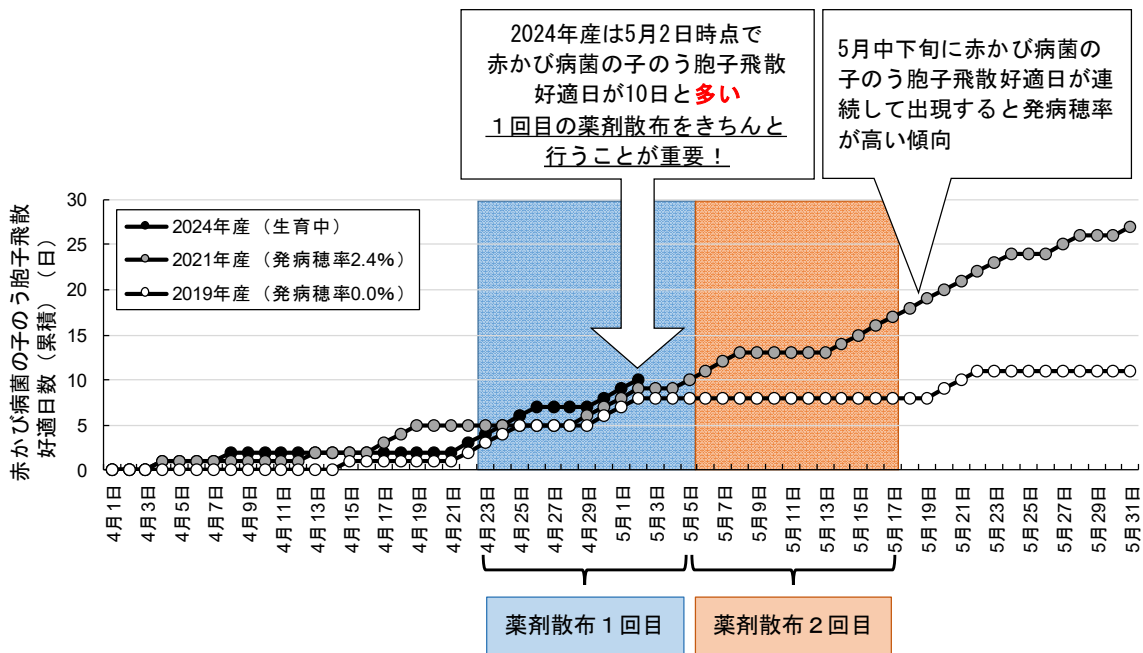


図1 4月1日から5月31日の赤かび病菌の子のう胞子飛散好適日の出現推移（古河アメダス）  
注）2019年産は発病穂率0.0%、2021年産は発病穂率2.4%（県病害虫防除部調べ）

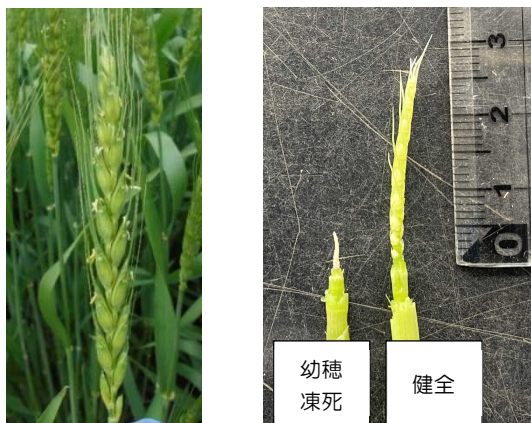


図2 小麦「さとのそら」の開花期の様子（左）と幼穂凍死の様子（右）



病害虫発生予報5月号（県病害虫防除部、令和6年4月24日発行）

表1 小麦赤かび病の防除に有効な主な殺菌剤

対象作物	薬剤名	使用方法	希釈倍数 (散布液量)	使用時期	本剤の使用回数	有効成分 (使用回数)	FRAC コード
小麦	ミラビス フロアブル	散布	1500～2000 倍 (50～150L/10a)	収穫 7 日前 まで	2 回 以内	ピジフルトフェン (2 回以内)	7 (C2)
		散布 (フォームスプレー)	250～500 倍 (25L/10a)				
		無人航空機 による散布	8～16 倍 (0.8L/10a)				
	シルバキュア フロアブル	散布	2000 倍 (60～150L/10a)	収穫 7 日前 まで	2 回 以内	テブコゾール (3 回以内 ただし、根雪 前は 1 回以 内、融雪後は 2 回以内)	3 (G1)
		散布 (フォームスプレー)	500 倍 (25L/10a)				
		無人航空機 による散布	16 倍 (0.8L/10a)				
麦類	ワークアップ フロアブル	散布	2000～3000 倍 (60～150L/10a)	収穫 7 日前 まで	3 回 以内	メコゾール (3 回以内)	3 (G1)
		散布 (フォームスプレー)	500～750 倍 (25L/10a)				
		無人航空機 による散布	10～24 倍 (0.8L/10a)				
小麦	チルト乳剤 25	散布	1000～2000 倍 (60～150L/10a)	収穫 3 日前 まで	3 回 以内	プロピコゾール (5 回以内 ただし、根雪 前は 2 回以 内、春期以降 は 3 回以内)	3 (G1)
		無人航空機 による散布	8 倍 (0.8L/10a)	収穫 7 日前 まで			
	ストロビー フロアブル	散布	2000～3000 倍 (60～150L/10a)	収穫 14 日 前まで	3 回 以内	クワキシメチル (3 回以内)	11 (C3)
		散布 (フォームスプレー)	500 倍 (25L/10a)				
	トップジン M 水和剤	散布	1000～1500 倍 (60～150L/10a)	収穫 14 日 前まで	3 回 以内 (た だ し 出 穂 期 以 降 は 2 回 以 内)	チオファネートメチル (4 回以内 ただし、種子 への処理は 1 回以内、散布 及び無人航空 機散布は合計 3 回以内、出 穂期以降は 2 回以内)	1 (B1)
		散布 (フォームスプレー)	250 倍 (25L/10a)				

農薬を使用する際は、必ず使用前にラベルを見て、対象作物、希釈倍数や散布液量、使用時期、使用回数等を確認しましょう(令和6年5月1日登録確認)。農薬散布時には風向、風速、散布位置やノズルの向き等に注意し、周辺作物に農薬が飛散(ドリフト)しないように注意しましょう。